

診察の順番を待つ母子の列。自分の番が回ってくるのはいつ?—ジャバ郡で



南アジアの医療拠点を目指して

子ども病院をぜひともつくりたい。患者は市外からも来るでしょうが、運営はプトワル市が責任を持ってやります。

病院を建設する場合、建てた後のメンテナンスで失敗するケースが見られますが、子どもの場合は患者数が多い。お金を持って

いる人からは治療費を取り、貧しい人からは取らないという方法でも財政的にやってもいけます。経済団体が支援することも決まっていますし、市からも資金援助をし、NGOなども協力してくれる予定です。この病院ができれば、日本とネパールの友好の象徴になる。応援をお願いします。

運営には万全を期す
プトワル市のスルヤ・ブラサド・ブランダ市長(56)



あえぐ小さな命

ネパールからの悲痛な叫び

子ども病院建設に希望託し



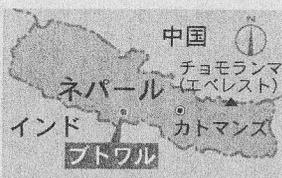
このような不衛生な光景はいたる所にあり、子どもの健康をむしろ脅かす



唯一の小児病院へ数日ばかりで

「助けて」——。アジアで最も貧しいネパールで、幼い子どもたちが次々と命を落としている。首都・カトマンズにある国内で唯一の小児専門病院は、全土から患者が集中して悲鳴をあげ、各地の一般病院も子どもを抱えた母親で連日埋まっていた。貧しさのため、病院に來れなくて亡くなる子どもたちも多い。5歳未満児の死亡率は1000人中128人(1993年)。日本(6人)の20倍以上だ。この子どもたちを救おうと、現地で「AMDA(アジア医師連絡協議会)ネパール」などが子ども病院の建設委員会をつくった。山々に遮られた国土で、中東部のカトマンズに運ぶまでに手遅れになる子どもたちが多い。南西部をカバーしようと、プトワル市で計画を進めている。病院関係者や市民も口々に早期実現を訴えており、委員会は「日本からもぜひ援助を」と訴えている。

文・連見 新也
写真・懸尾 公治



遠く離れた村からいくつもの峠を越えてやっと入院。母親の乳房を吸う力も弱いサザナちゃん—カトマンズ・カントイ小児病院で

んだのは10時間後だった。スザナちゃんは今後6カ月。顔色が青黒い。手足は骨と皮ばかりだ。聞けば、ぼつと涙ろした。朝から20回以上も下痢が

「飛行機が欠航。空港からタクシーを飛ばしてきました。たのび着くと、日がとっぷり暮れていた。病院の外來患者は1日450人。150床あるベッドは、入院させないといけない患者の3分の1が収容できない。」

「半分が、カトマンズ周辺部以外の地方からとくらいかけて来ている。下痢、赤痢、肺炎、栄養失調……。保健省は各地の小児病院をつくる」と言っているが、予算がない。実現のめども、全くたっていない。子ども人口は4割を超えた。必要小児病院が、せむし必要だ。クリシュナ・ドズ・カンドゥ院長(56)は厳しい表情で病棟を見渡した。

5歳未満児の死亡率は日本の20倍

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

小さな命がひしめいて、泣き声を上げ、母の胸でぐったりしてしまっている。早期のカトマンズの「カントイ小児病院」。1階の外來病棟で、診察を待つ母親は、どの顔も不安げだ。2階の病棟。下痢で苦しん

だり、弱々しく母の乳房に口を当てて子どもがベッドに横たわる。「近くに小児病院があればいいのですが。ティル、ただろうか。病院へ駆け込

クマリさん(20)はベッドで寝た。スザナちゃんを添い寝していた。目がしょぼつき、顔は疲れ切っている。カトマンズから南へ進む、離れた村で突然、スザナちゃんを抱えて、夜行バスに乗った。峠をいくつ越え

30床のベッドが、子どもで埋まる。点検を受けたり、毛布でくるまれたり。一つのベッドから泣き声が二つ。見ると二人の子どもが寝ている。半敷近のベッドがそうだ。そばには、添い寝できない母親が座っている。

インド国境に近いネパール東南部。ダマック市のAMDA病院。隣のジャバ郡など7カ所の「アタン難民キャンプ」の約7万人の治療を目的に開設された。今は、地域医療の中核病院になっている。

「難民の母子と、この地域の母子の同居です。パル・ケル院長(38)が一つのベッドに指をさした。その母子も指をさした。別の母と入れ替わった。本日は退院は3日先ですが、急を要する患者が多いので」

外來の8割は「難民以外」の患者が占める。「難民は治療費が無料、地域の人には有料なんです。ほとんどもちも母親。目の

友好のシンボルに

ベッド足りず同床

「恩返し」の国民参加型国際貢献を

50歳代というネパールの平均寿命の短さは、5歳未満児の死亡率の高さからきています。この貧しい国の子どもたちを、まず救わないといけない。幸い、日本とネパールの間には、友好的な土壌があります。アジアの先進国として、日本は人道援助の立場からも積極的に協力していくべきだと思います。

阪神大震災の際はネパールからも医師の緊急応援がありました。今回の子ども病院建設への協力は、その「お返し」として国民参加

AMD A(本部・岡山市)の菅波茂代表(49)



型の国際貢献にもなるとおもいます。

AMD Aネパールは、内戦のアフリカ、水害のあったバングラデシュなど、世界各地に出向いているAMD Aの多国籍医師団の中核を担っています。今回の病院建設が着実に進めば、日

本の国際援助の良きパートナーが得られることにもなります。

AMD A本部としても医療技術指導に専門家を派遣するなど、最大限の支援を行うつもりです。みんなで支援の方法を考えたいと思います。

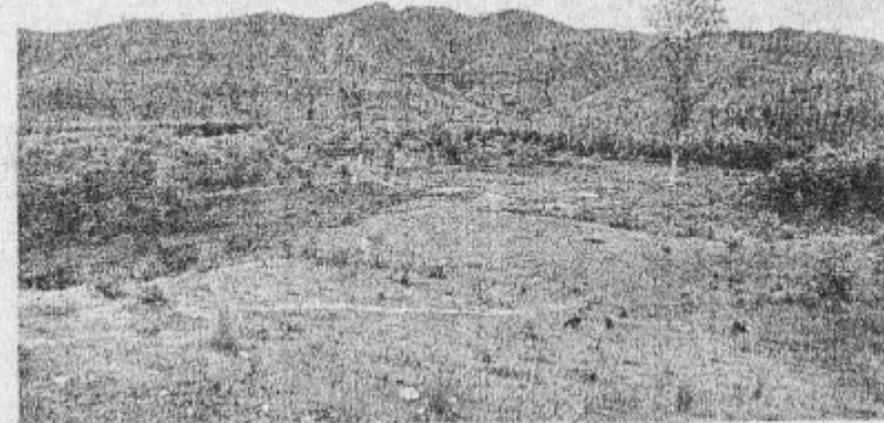
◆小児、産婦人科を併設

ブトワル市に計画中のこの新しい子ども病院は、同市中心部から東に2*。の牧草地＝写真。国土の南部、インド国境沿いを東西に走る高速道路から800*。の距離で、交通の便はいい。約7*。の用地があり、将来的にベッドや病棟の増設などもできる。

乳幼児とその母親を守るため、小児科と産婦人科を併設。貧しくて病院に来ない母子を減らすため、薬局は院内に置き、貧しい人たちには薬を無料で渡すのが特徴だ。

計画では、まずベッド100床の病棟と外来からなる建物1棟からスタート。軌道に乗れば2～3年後に研修センターをつくり、ここで若い医師を研修させ、山間部の村まで派遣。医療と保健衛生への啓発活動や診察も行う。

◆医師研修センターも



◆AMD Aと地元がスクラム

委員会事務局を務めるAMD Aネパールは、登録医師25人。阪神大震災の際、医師3人が日本で被災民の治療に当たった。

事務局は、AMD Aのほか、ブトワル市、地元経済団体で構成。予定地の国有地を譲渡する手続き▷病院建設のため

の整地、電気、水道などのインフラ整備▷建設後のメンテナンス費用——をブトワル市が担当。働く医師、医療設備計画などのソフト面はAMD Aが責任を持つ。建設資金はAMD Aが寄金を募るが、当面は借金で賄うことになっている。

「私たちの子どもが病気になった時はインドまで行っている。いい病院があるなら行かない」「できるだけ早くつくってほしい」。事務局会議が先月、ブトワル市で行われた。出席した市議が口々に建設への期待を語る。会議後は全員が建設予定地を見学した。

AMD Aネパールの代表で、神戸大医学部に留学中のラメシュワル・ボカレルさん(38)は「この病院は、子どもを救う拠点になる。今も医師より祈禱師を信じて病院に来ない人たちが農村部に多い。こうした人への啓発活動を進めなければならない。ネパール南部の亜熱帯にあるので、将来的には南アジアの緊急援助の基地にもなる。ぜひ日本からの温かい援助をお願いします」と、熱っぽく話した。

子ども病院建設にご協力を

子どもたちへ目に見える援助を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関への寄金に加え、ネパールで進められ

ている子ども病院建設計画にも協力します。救援金は、右記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。

〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)